

## 前五世紀後半における国際関係とアウトノミア概念

——アテナイとスパルタによるヘゲモニー争いを背景に——

一一〇

篠原道法

### はじめに

前五世紀後半の国際関係は、アテナイの帝国化<sup>①</sup>および、それに危機感を感じたスパルタとアテナイによるヘゲモニー争いを中心にして展開した。当時の国際関係を読み解く上で注目すべきは、この時期にアウトノミアという概念が登場した、あるいは、この概念が重要な役割を果たすようになったと思われる点である。このことは、対立の時代に生きたトウキユデイデスがその原因と経過を叙述する際に、「自治」「独立」<sup>②</sup>などと一般に訳されるアウトノミア—autonomia—という概念、主にその形容詞形であるアウトノモス—autonomos—を頻繁に用いているという事実から窺い知ることができる。そこで、本稿では、アウトノミアやそれと語基を同じくする語の用例分析を中心に、国家間でそれを用いたいかなる対話がなされたのかを明らかにし、前五世紀後半における国際関係について一つの可能性を示したい。

### 第一章 研究動向と問題の所在

アウトノミアは、「自由」を意味するエレウテリア—eleutheria—との関係で、永きに渡って議論されている概念である。<sup>③</sup>伝統的に、アウトノミアは「自治」を意味しているとされてきた。

現在、この見解を支持する立場の研究者に大きな影響を与えているのは、Bickermanによる基礎的な研究である。Bickermanによれば、エレウテリアが絶対的でオリジナルな主権を表すのに対し、アウトノミアは、大国の影響下において実現され、「自治」権を保持する一方で、対外的な決定権を欠く状態を意味している。<sup>④</sup>そして、この概念は、ペルシア支配下においてポリスに与えられた立場を表すために生み出されたとする。<sup>⑤</sup>概念の起源を巡るこの解釈は、それを支える直接的な証拠も無く、また、ヘロドトスが小アジアのギリシア諸国とペルシアの関係について記述する際にアウトノミアという語を用いていないこともあって批判を呼んだ。<sup>⑥</sup>

一方で、アウトノミアは国際関係を規定する概念であったと見なすBickermanの視点を受け入れて活かそうとする立場もある。Ostwaldは、Bickermanの研究を踏まえて、エレウテリアが自助努力によって獲得される「独立」した状態を意味するのに対して、アウトノミアは、干渉を受けながらも、大国が小国に容認することによって維持される政治的独立<sup>⑦</sup>「自治」を意味していたとする。Ostwaldによれば、この政治的独立は、司法システムへの外部権力の介入や貢税の支払いなど、いくつかの事項において他国に従属することを問題としない一面を持つ一方で、城壁を保持しうる能力が示すような、国家の存続にとって必須で最も基本的な力を行使し、独自の規範—auto-nomos—を確立するポテンシャル

ルを有する状態を意味している。こうした解釈に基づいて、Ostwaldは、アウトノミアという概念が生み出された背景を、デロス同盟がアテナイ帝国へと変質する中で、同盟諸国が、独自の規範を享受しているという点において、同じ権利を保持していることをアテナイに認めさせようとしたことに求めている<sup>⑧</sup>。

しかし、Ostwaldのように、アウトノミアを、「独立」を有するのとは対照的に、大国の影響下の下で、ある部分に関しては従属を受け入れうる状態を表すネガティブな概念であると想定した場合、それがアテナイの支配に対する抵抗の指標として登場し、十分にその機能を果たし得たかどうかについては疑問が残る<sup>⑨</sup>。

こうした視点からBickermanやOstwaldによる見解を批判し、実際には、アウトノミアは、従属国のような不自由な立場とは異なり、自ら関わる事柄に対して決定権を有していることに主眼を置いたポジティブな概念であったと主張したのがRaaflaubである。Raaflaubは、独自の規範を確立するポテンシャルを有する状態をアウトノミアが示しているという点についてはOstwaldの主張を支持している<sup>⑩</sup>。その一方で、もし国家が完全には行政を担うことができない状態が常に想定されていたならば、これほど重要な役割を果たすことはなかったであろうとして、BickermanやOstwaldのようにアウトノミアをネガティブな概念として捉えるべきではないと主張している<sup>⑪</sup>。その上で、エレウテリアが外国による支配を受けない状態を意味するのに対し、アウトノミアは自己決定権を意味しており、どちらの概念を用いるかは、対象となる国家の諸側面の内、何を強調するかに左右されたと主張する<sup>⑫</sup>。例えば、大国との関係でアウトノミアが問題となる場合、それは、必ずしも、Bickermanが考えるように、その影響下にあり権利を制限された状態にあることを前提としているのではなく、大国の存在にもかかわらず、その影響を受け

ずに、十分に自らを管理できる立場にあることも意味しえた。

こうした認識に基づいて、Raaflaubは、アウトノミア概念の起源を、アテナイの帝国化に伴い、アテナイからの離反や完全な自由の回復が望むべくもなくなる中で、デロス同盟諸国において、少なくとも自己決定権を自らの領域において保持することがより重要視されるようになったことに求めている<sup>⑬</sup>。

Raaflaubの見解は、アウトノミアのポジティブな側面を強調することによって、同盟国による抵抗の指標としてアウトノミアが用いられ得た可能性を十分に説明できているかのように見える。だが、その一方で、アウトノミアはエレウテリアにとつて不可欠な要素であるものの、単純にそれを保持していること＝エレウテリアではなく、状況に応じて、完全に「独立」した状態も、一定の権利を制限された「自治」の状態も想定しうる概念であると、Raaflaubが主張している点に注意せねばならない<sup>⑭</sup>。この場合、Ostwaldによる解釈と同様に、アテナイ帝国に対する抵抗の指標としてアウトノミアが機能しえたかについては疑問が残る。というのも、Raaflaubの理解に従うならば、見方を変えれば、アウトノミアはアテナイによる支配の正当化のための指標にもなりうるからである。そのような概念を、抵抗の指標として、デロス同盟諸国が生み出したと考えることができるだろうか。Raaflaubは、この疑問に答える十分な証拠を提示できていないのである。

これに対して、アウトノミアがポジティブな概念であったとするRaaflaubの見解を支持しながらも、それは、強国への従属により権利が制限された「自治」の状態を念頭に置くようなことはなく、あくまで「独立」した状態を意味していたとするのがHansenである。Hansenは、用例を詳細に分析して、アウトノミアは、言葉としては「従属」——*hypēkoon*—の対義語であり、概念の出現以来、古典期の終わりまで、

一般的に、「独立」した状態―国内における行政、司法を自らの意思で運用し、また、外交においても自由に行動する権利を有する状態―を意味する概念であったと主張した<sup>15</sup>。Hansenによれば、多くのポリスが何がしかの形―例えば、同盟や連邦―で他国に従属しており、上記の基準を全て満たすポリスはほとんど無かったため、古典期のギリシア人自身、アウトノミアをポリスの重要な性格とは見なしていなかった。むしろポリスにとって重要なのは、「独立」した状態ではなく、内政を自らの意思で運用できる状態、つまり「自治」の状態にあったのだが、古典期においては、このような意味合いを込めてアウトノミアが用いられることは無かったのである。こうした理解に基づいて、Hansenは、アウトノミアを有することをポリスの条件とする伝統的な解釈はフィクションであるとしている<sup>16</sup>。

確かに、「独立」の意味合いを込めてアウトノミアが用いられている例が、トゥキュディデスの記述に見られる。例えば、前四二七年のペロポネソス軍のプラタイア遠征に際し、プラタイア人がペロポネソス陣営に使節を派遣して述べた「(前四七九年に)パウサニアスがゼウス・エリュテリオスに犠牲を捧げて認めたように、我々が隷属することなくアウトノモスであることを認めよ<sup>17</sup>」という言から、アウトノミアは、隷属と対極にある状態としてイメージされ、また、支配からの解放により「独立」した状態を意味していることが窺える。

もしも、Hansenが主張するように、一般的に、「独立」した状態を意味していたならば、デロス同盟諸国が抵抗の指標としてアウトノミア概念を用いることにも問題はなく、OstwaldやRauflaubによる起源に関する解釈も十分に正当性を持つことになる。しかしながら、アウトノミアが「独立」を意味する概念であったとした場合、二つの疑問点が残る。

まずは、その登場時期についてである。この問題に関連して興味深いのは、ヘロドトスの『歴史』にはアウトノモスの用例が二例しか確認できないことである。メソポタミア地方諸国のアッシリアからの独立について記述する際に、ヘロドトスは、「それらの諸国がアウトノモスになった<sup>18</sup>」としているのだが、これは例外であって、基本的に、対外的な自由を獲得し、「独立」した状態を表現する際、ヘロドトスは、エレウテリアやそれと語基を同じくする語を用いている。この事実は、前五世紀中葉に壮年期を迎えた彼や彼の同時代人にとって、アウトノミアは少なくとも、一般的な概念ではなかったことを意味しているように思われる。既に述べたように、前五世紀後半を生きたトゥキュディデスの『歴史』において、アウトノミアやそれと語基を同じくする語が頻繁に用いられている事実を踏まえるならば<sup>19</sup>、前五世紀後半にアテナイとスパルタのヘゲモニー争いを中心にして展開した国際関係の中で、この概念が生み出された、もしくは、少なくとも一般化したと見るべきである<sup>20</sup>。以上の点を考慮して、なぜ、前五世紀後半の国際関係において、「独立」を意味する言葉として、エレウテリアではなく、アウトノミアが用いられるようになったのかを明らかにする必要がある。

次に、はたして本当に、アウトノミア＝「独立」とする認識が一般的であったのかどうかという問題である。この問題に関しては、トゥキュディデスが興味深い事実を提供している。前四三一年に開戦を迎えたペロポネソス戦争前夜、ペリクレスは、デロス同盟加盟国のアウトノミアを求めるスパルタ側の最後通告に関して、「スパルタ側も、支配下の国に対して、自分の都合のよいようにではなく、支配下の国が望むようにアウトノモスたることを許すべきだ<sup>21</sup>」と主張しており、この用例から、アウトノミアは、解釈に幅があり、「独立」した状態ではなく、一定の制限を受けた状態、つまり「自治」も意味する可能性があったことが窺

える。そもそも語源的には、独自の規範—*auto-nomos*—の下にあることを意味していることを考慮するならば、そうした実態をどのように解釈するかについては、多様な見方ができたことは容易に想定できる。それ故に、Hansenの考えるように、アウトノミア<sup>②</sup>「独立」とする認識が一般的であったとすることは留保が必要であろう。むしろ、アストノミアが「自治」とも認識されたという事実を踏まえた上で、「独立」という解釈が持つ意味を考えねばならない。

以上、Hansenによる研究の問題点を指摘してきたが、その原因は、彼の分析がアウトノミアの語義を重視する一方で、それが使われたコンテキストには十分な配慮をしていない点にあるとは明らかである。同じ史的には、Hansen以前の研究に対してもできよう。例えば、Raufhuberは、それが実際に使われたコンテキストというよりは、その意味から、「アテナイの支配に対するデロス同盟諸国の抵抗」というアウトノミア概念の起源を推測しているに過ぎないのである。

そこで、本稿では、こうした課題を踏まえて、前五世紀後半におけるアウトノミア概念の用例を改めて検討する。その際には、まず、「自治」「独立」どちらの意味合いで、誰が、どのような政治、思想的な背景に基づいてアウトノミア概念を用いていたのかに注目する。ただし、ここで注意せねばならないのは、前五世紀後半の言論空間を再構築するための史料を、ほとんどトゥキュデデスに依存しなければならぬことである。トゥキュデデスは、できる限り客観的に事実を提供しようとしていたことは確かであるが、彼の認識がどれほど一般的であるのかについては、一定の留保が必要であろう。こうした限界を認識しつつも、前五世紀後半におけるアウトノミア概念の展開、そして、それを基軸に据えた国際関係の有り様について一つの可能性を提示したい。

## 第二章 「独立」概念としてのアウトノミア

### (一) 誰が「独立」と認識したのか？

まず、誰がアウトノミア<sup>②</sup>「独立」とする認識に立っていたのであるうか。アウトノミアが「独立」の意味合いを込めて用いられている事例としては、前四二四年のカルキデイケ遠征に際して、スパルタ人ブラシダスが、デロス同盟加盟国であるアカントスの人々を前に行った演説<sup>②</sup>や、前四一五年のアテナイによるシケリア遠征に際し、カマリナ人を前にしてシユラクサイ代表が行った演説<sup>②</sup>、前四二八年にミュティレネ代表がアテナイから離反しペロポネソス同盟側につく正当性について主張した演説<sup>②</sup>などが確認される。

例えば、スパルタ人ブラシダスは、アテナイから離反して、ペロポネソス側に加わるべきであると主張し、ペロポネソス同盟側についてた場合に生じる状況について次のように語っている。

〔前略〕すなわち、少なくとも私が同盟国として加入させたものはアウトノモスたること。また、我々は諸君を武力や欺瞞によって加入させ、同盟国として拘束するのではなく、逆に、アテナイによって隷属化されている諸君と同盟を結ぼうとしている。<sup>②</sup>

ここでは、現在アテナイとの同盟によってアカントスにもたらされる隷属状態と対照的な状態として、アウトノミアが位置づけられている。そして、ブラシダスが、続けて「こちらがアウトノミアを提供しているにもかかわらず諸君がアテナイに隷属し続けるのではなく、ギリシア人のために最初にエレウテリアを得るように」と勧告していることからも明らかのように、アウトノモスはエレウテリアと同格の状態、つまり、

「独立」した状態を意味しているのである。

次に、シユラクサイ代表は、カマリナ人を前にして、アテナイによるシケリアの隷属化を防ぐために、本来、我々は結束して次のような意識を持つべきだと主張している。

ここにいるのは、そのようにペルシア人か誰か、一人の人間を主人として載いてそれを次々に取り替えながら奴隷を続けるような、イオニア人、ヘレスポントス人、諸島の住民ではなく、アウトノモスの地であるペロポネソスからシケリアに移住したエレウテロス—eleutheros：エレウテリアの形容詞形—なドリス人なのだ。

ここでも、デロス同盟諸国のように隷属している諸国と対極にある状態、「独立」の意味合いを込めてドリス人をアウトノモスと表現していることが分かる。

同様に、ミュティレネ人がアテナイから離反してペロポネソス同盟側につく正当性について主張した演説において、ミュティレネ人代表は、デロス同盟結成時には各国が平等の立場から発言権を有していたのに対して、今日ではアテナイ人が同盟諸国の隷属化に励んでいる状況に触れて、次のように述べている。

もし彼ら(同盟諸国)が今日までアウトノモスであったならば、彼ら(アテナイ人)が我々に対して、乱暴な変革を断行することはないと、今より安心できたであろう。

以上の用例から、アテナイ帝国に批判的な立場をとる人々によって、「独立」の意味合いでアウトノミアが用いられていたことが窺える。彼らと同様な視点は、アテナイの帝国化に批判的であったトゥキュデデス自身によっても共有されている。彼は、前四四七年にアテナイが行ったポイオティア方面への遠征の顛末について次のように叙述している。

そして、(アテナイ軍は)カイロネイアを攻略して、住民を奴隷化し、守備隊を配置した上で、帰国の途に着いた。ところが、コロネイアまで進んだ時に彼らは襲撃された。(中略)彼ら(ポイオティア人の亡命者ら)は戦闘をして勝利し、アテナイ軍の一部を殺害して、一部を生け捕りにした。そこでアテナイ軍は捕虜の返還を条件に休戦を結び、全ポイオティアから撤退した。かくしてポイオティアでは、亡命者たちが帰国を果たし、その他の人々もアウトノモスとなったのである。

ここからは、アテナイの侵略の結果占領されて隷属化していたポイオティア諸国が、解放され「独立」を回復した状態を表すために、アウトノモスが用いられていることが分かる。

また、トゥキュデデスは、デロス同盟諸国に対するアテナイの対応についても、同様な視点から描いている。彼は、アテナイの帝国化について具体的に叙述するに際し、その導入として次のように語っている。

アテナイ人が指揮していた同盟諸国は、当初アウトノモスであり、共同の会議で討議していたが、アテナイ人は、この同盟を指揮しながら、今回の戦争とペルシア戦争との間に、異民族軍に対し、また離反した同盟諸国に対し、更にはペロポネソス側の同盟諸国との間で何度か起こった衝突に際して、戦争に訴えるか、或いは、政治的に処理して、次のようなこと(帝国化)を敢行したのである。

それに続けて、ナクソスの離反とその後の貢税国化—トゥキュデデスはこれを隷属化と呼んでいる—を事例として取り上げて、デロス同盟諸国も次々にアテナイの支配下に堕ちたと述べている。要するに、アテナイの帝国化に伴い、デロス同盟諸国はアウトノミアを失ったとされているのである。

そして、こうして「独立」を失った国家を、彼はしばしば従属国と表現している。例えば、前四一三年に行われたアテナイとシュラクサイとの戦いに関して、アテナイ人陣営の構成について、彼は次のように語っている。

遠征軍にはその他（アテナイの植民市以外）に、アテナイの従

属国やアウトノモスで（個別の）同盟条約に従った国も兵を送

つたし、更には、報酬で雇われた兵もいた。

このように叙述した上で、遠征軍の構成を詳細に描写しているのだが、トゥキュデイデスは、アウトノモスである国家として、ペロポネソス周辺のケファレニアとザキュントスを挙げている。これらはエレウテロスな国としても登場する国家でもあることから、デロス同盟諸国のようにアテナイの支配下にある国家とは対照的に、「独立」した状態にある国家であるためにアウトノモスとされていることが窺える。同様な認識に基づいて、前四一五年に開始されたシケリア遠征メンバーの内、個別に同盟を結んで、平等の立場から参加したアルゴスがアウトノモスと表現されている。これに対して、アテナイの支配下にあるデロス同盟諸国は従属国とされているのである。<sup>⑤⑥</sup> トウキュデイデスは、その他の箇所においても、事実に基づいて自らの評価を叙述する際には、一貫して、反アテナイ側と同様に、アウトノミアを「独立」の意味合いを込めて用いている。<sup>⑤⑦</sup>

以上の考察から明らかのように、反アテナイの立場をとる人々を中心にして、隷属と対照的な状態、「独立」を意味する概念として、アウトノミアが用いられていたのである。

## （二）反アテナイ陣営によるスローガンとしての

### 「隷属」と「解放」

前五世紀後半における国際関係とアウトノミア概念

アテナイに批判的な立場をとる人々が、このように隷属と対極にある状態、「独立」の意味合いを込めてアウトノミアを用いた政治、思想的背景には、アテナイと対立したスパルタが盟主を勤めたペロポネソス同盟側によって提示された、反アテナイ・プロパガンダが大きく関係しているように思われる。<sup>⑤⑧</sup> ペロポネソス同盟側のプロパガンダは、前四三二年に開催されたペロポネソス同盟会議上でコリントス人がアテナイとの開戦を訴えて行った二つの演説（以下、演説IおよびIIと称す）<sup>⑤⑨</sup> から窺うことができる。

演説Iにおいて、コリントス人の代表は、アテナイのギリシア諸国への対応について次のように語っている。

ご覧のとおり、ある者たちは隷属化されてしまっているし、

またある者たち、特に我が同盟諸国に対して彼ら（アテナイ人）

は企てをしており、しかも長期に渡って軍備を整えている。

同様に、アテナイが他国の支配、隷属化を目標としているとする主張は、演説IIからも窺える。演説IIは、アテナイに対抗するための費用供出の必要性を主張する際に、デロス同盟の中で貢納を義務付けられている諸国を次のように描写している。

さもなければ（費用供出をしなければ）、奇妙である。彼ら

（アテナイ人）の同盟諸国はおれの隷属のために怠りなく貢納

をしているのに、その一方で、我々が敵に報復して、おのれを

守るために費用を供出しようとしないうらば。

コリントス人の演説に登場する「隷属」という表現は、ペルシアによるギリシア諸国への支配を表現する際にしばしば登場する表現であるため、<sup>⑥⑩</sup> ペルシアによる隷属からの防衛というデロス同盟の理念と矛盾を呈し、不正なアテナイ人の行動を強調する役割を果たしている。

そして、こうした、アテナイによる他国の従属化という現状を踏まえ

て、コリントス人は演説Ⅱを次のように締めくくっている。

(アテナイは) ある国に対してはすでに支配しており、またある国に対してはそれを企てているのだから、ギリシアにおいて僭主として君臨しているポリス(アテナイ)を全体に対する共通の敵と見なして、我々はこれを攻めて打倒しよう。そして、我々自身は、今後危険な目に遭うことなく暮らして、現在隷属しているギリシア人をエレウテロスにしよう。

要するに、ペロポネソス同盟諸国、さらには、全ギリシア人のエレウテリアを防衛するべく、僭主のごとくギリシア諸都市の隷属化を目論むアテナイと開戦すべきであるとするのが、コリントス人の主張である。

この「アテナイによる隷属からのギリシア人の解放」というスローガンは、ペロポネソス同盟の盟主であるスパルタにより、対交渉の場においてしきりに用いられていたことが、トゥキュディデスの記述から窺える<sup>④</sup>。とりわけ、第一章(二)で取り上げた、スパルタ人ブラシダスがアカントス人を前にして行った演説が参考になる。ブラシダスは、演説の最初に、軍隊が派遣された理由について次のように語っている。

アカントス人諸君、ラケダイモン人が私と軍隊を派遣したのは、我々が開戦する際に宣言した理由、つまりギリシアをエレウテロスにするためにアテナイ人と戦うという大義を実証するためである。

こうして、アテナイからギリシアを解放するために来た主張した上で、デロス同盟に留まってギリシア人のエレウテリアを妨げるのではなく、離反してペロポネソス同盟側に加わり、自らもアウトノミアを獲得して、隷属状態から解放されるべきであるとブラシダスは語っているのである。

この演説から窺えるように、「アテナイによる隷属からのギリシア人の解放」というスローガンを掲げることによって、スパルタ側は自らの行

為の正当性を主張し、他国を自らの陣営に引き入れようと勤めていたのである。

そして、このスローガンは、ペロポネソス同盟諸国以外でも、反アテナイの立場をとる人々によって共有され、内外の交渉において自らの立場を正当化するために利用されることになる。例えば、第一章(二)で取り上げた、前四二八年のミュティレネ人代表の演説では、アテナイと同盟を結んでいた理由と、元々アウトノミアが保障されていたはずのデロス同盟がおかれている現在の状況について次のように描写されている。

我々はギリシア人の奴隷化のためではなく、ペルシアからギリシアをエレウテロスにするためにアテナイと同盟を結んだのであった。そして、彼らが平等の立場から指導する限りにおいて、熱心に従った。だが、彼らがペルシアに対する敵対心を緩めて、同盟諸国の隷属化に励んでいるのを見た時に、恐怖を感じざるを得なかった。

このように、現在、同盟諸国にもたらされているのはアテナイによる隷属であるとする認識に基づいて、同盟から離反するのはギリシア人を解放するためであるとし、また、スパルタ側も解放者としての行動を示すように促している。その他にも、アテナイによる隷属を強調することで自らの立場を正当化しようとする事例は、第一章(二)で取り上げたカマリナにおけるシユラクサイ代表の発言(対カマリナ)や、ケルキュラ内乱における、ケルキュラ寡頭派の主張(対ケルキュラ民衆)、メロス対談<sup>⑤</sup>におけるメロス指導者の発言(対アテナイ)などから窺える。

以上の考察から明らかのように、ペロポネソス同盟は、スパルタを中心に「アテナイによる隷属からのギリシア人の解放」をスローガンとして掲げて、自らの陣営の拡大に努めていた。同時に、反アテナイの立場

をとる人々も、こうしたスローガンに則って、自らの立場の正当性を主張することになる。この事実から、スパルタ側が、自らの反アテナイ・プロパガンダに沿うように、隷属と対極にある状態、つまり「独立」の意味合いを込めて、アウトノミアを用いていたことが窺われる。

### 第三章 「自治」概念としてのアウトノミア

#### (一) 誰が「自治」と認識したのか？

それでは、誰が「自治」の意味合いを込めてアウトノミアを用いていたのであろうか。用例の分析を進めるならば、ほとんど場合、アテナイ人が同盟諸国との関係について論じる際に、「自治」概念としてのアウトノミアが登場することが明らかとなる。こうした状況を最も象徴的に示しているのは、カマリナ人を前にしてシュラクサイがシケリア団結の必要性について演説した後に、アテナイ代表であるエウフェモスが行った反対演説<sup>51</sup>である。エウフェモスは、カマリナ側を冷遇するのではなく、その有用性に基づき友好国として扱おうとしているのだと主張し、ギリシア本土における同盟諸国とアテナイの関係をその実例として挙げて次のように述べている。

事実、あちらでは、同盟国は、それぞれの仕方です役立つように管理している。キオス、メテュムナには軍船供出の代償としてアウトノモスとし、多数の国には貢税を納めさせてそれよりも厳しく待遇し、その他にも小さな島国で征服は容易だが、ペロポネソスの周辺海域で戦略上重要な位置にあるため、エレウテロスとして同盟に参加している国（ケファレニア、ザキュントス、ケルキュラ）もある<sup>52</sup>。

この発言から、アテナイは同盟国を三つに区別されていたことが分かる。第一に、デロス同盟国の内、貢税を課せられ、非常に厳しく待遇されている国家である。第二に、デロス同盟国の内、軍船提供の結果として、第一のグループよりもよい扱いをされているキオスやメテュムナであり、これはアウトノミアを有する国家とされている。そして、第三に、個別にアテナイと同盟を結び遠征に参加しているケファレニア、ザキュントス、ケルキュラであり、これはエレウテリアを有する国家である。エウフェモスの発言に見られる同盟国の分類において注目すべき点は、第一に、反アテナイ側のように、アウトノミアをエレウテリアと同じ状態を指す表現として用いるのではなく、両者を明確に区別していることである。アテナイ側が両者を区別していたことは、アテナイの対外政策に批判的な人々による、アテナイと同盟国の関係に対する評価からも窺える。例えば、トゥキュデデスは、アテナイによるシケリア遠征に従った諸国について次のように描写している。

遠征軍にはその他に、(a) 従属国やアウトノモスとして同盟条約に従った国も兵を送り、更には報酬で雇われた兵もいた。従属国で貢税を納めている国としては、〈中略〉イオニア地方からはミレトス、サモス、キオスが参加した。(b) この内、キオスは貢税を課せられていないが、船を提供するアウトノモスとして遠征に加わった。これに加えて、アイオリス族からは、(c) 貢税ではなく船によって従属する国家であるメテュムナ、それに貢税納付国のテネドスとアイノスが参加した。〈中略〉(d) ペロポネソス周辺の島々で言うと、ケファレニアとザキュントスはアウトノモスであった（以下略）<sup>53</sup>。

この箇所は、先に触れたエウフェモスによる同盟国の分類（Thuc. VI.85.）と比較した場合、トゥキュデデス自身によるアウトノミアや

エレウテリアの用法に混乱があるように見えるため、これまで、その解釈を巡って多くの議論がされてきた。伝統的な解釈は、アウトノミアの解釈には幅があるとする立場から、トゥキュデイデスは見方によってニユアンスを変えて、キオスやメテウムナを、アウトノモス（他の同盟国に比べてアテナイによる支配の程度が低いという点で）、従属国（アテナイに付き従っている点で）どちらとしても認識していたとする。同様に、ケファレニア、ザキントス、ケルキュラの場合も、アウトノモス（「自治」を有している点で）、エレウテロス（デロス同盟の枠外にあり、任意に基づく個別同盟を結んでいるという点で）のどちらに認識することも、トゥキュデイデスにとつて問題なかったことになる。<sup>55)</sup>

しかしながら、果たして本当に、このように短い節では解釈に混乱を招く可能性が非常に高いにも関わらず、トゥキュデイデスが敢えて、自らの解釈に基づいてニユアンスを換えてアウトノミアを用いるようなことをするだろうかという疑問が残る。むしろ、従来の解釈のように全てをトゥキュデイデス自身の認識に帰するのではなく、遠征軍に関する客観的な事実の記述(b)と、トゥキュデイデス自身の評価(a)(c)(d)が混在していると想定すれば、問題は解決するように思われる。<sup>56)</sup> この理解に基づいて解釈するならば、まず、アテナイ人エウフェモスがアウトノモスと呼ぶキオスやメテウムナ―(b)の記述―は、トゥキュデイデスからすれば、そのように呼ばれながらも、「独立」した状態ではなく、アテナイにある程度「従属」している状態にあった―(a)(c)の記述―。これに対して、トゥキュデイデスの認識に基づいて真にアウトノミア―「独立」を保持しているとは見なせるのは、エウフェモスがエレウテロスと認識していたケファレニアやザキントスに過ぎなかった―(d)の記述―のである。<sup>57)</sup>

同様に、アテナイ側の認識では、アウトノミア―エレウテリアではなく、アテナイへの一定の従属した「自治」の状態を意味していたことが、

ミュティレネ人代表がペロポネソス同盟軍を前にして行った演説の「我々は確かにアウトノモスであり、名目上エレウテロスであった」という一節からも分かる。ここからは、ミュティレネはアウトノミアを有する立場を与えられているものの、「独立」した状態にはなかったことが窺えよう。

同盟諸国の分類で注目すべき第二の点は、デロス同盟諸国においてアウトノミアを有する国家は、それを有しない国家よりも特権的であると認識されていることである。これについては、サモスにおける民主クレーターの結果について触れた次の叙述が参考になる。

アテナイ人たちは、サモスの忠誠はゆるぎないとして、アウトノミアの付与を決議したので、それ以降、民衆がポリスを運営することになった。<sup>58)</sup>

ここからは、アテナイに忠実である見返りとしてアウトノミアを保証された結果、サモスは、民衆が国制を自由に運営できる状態に保たれたことが分かる。<sup>59)</sup> 実際には、アテナイにとつて有用である国家に対してアウトノミアを保証した事例が、いくつかの碑文から確認されている。例えば、貢税国であったセリュンブリアと前四〇八年に結んだ条約には、「彼らが信頼するような方法で、国制に関してアウトノモスにする」という規定がある。<sup>60)</sup> アテナイ側は、このようにアウトノミアの特権を付与して、内政において一定の自由を有することを明確に保障したのである。<sup>61)</sup> ただし、このようにアウトノミアを保証された状態は、個別に同盟を結んでいたペロポネソス周辺国の保持していたような「独立」した状態を意味しなかった。このことは、前四二七／六年にミュティレネに対してなされた決議において、アテナイに忠実であることを理由にアウトノミアを認める一方、アテナイの命令権の維持を記しているとみられる条項から窺える。<sup>62)</sup>

以上の考察から明らかなように、「自治」概念としてのアウトノミアは、アテナイが、デロス同盟国の内、ある程度の内政における自由<sup>⑥</sup>「自治」を有する国家の立場を表す場合に登場するのである。

## (二) アテナイ帝国における秩序

アテナイが「自治」の意味合いを込めてアウトノミアを用いた政治、思想的な背景には、反アテナイ側のプロパガンダに対抗して出された、帝国支配正当化の論理が大きく影響を与えているように思われる。<sup>⑦</sup> トウキユディデスは反アテナイ側に比べてアテナイ側の言説についてあまり記載していないものの、少ない記述から、帝国正当化の論理の一端を窺うことができる。

とりわけ、それがまとまった形で登場するのが、第二章(二)で取り上げたコリントス人の演説Iの後に、別の用事でたまたまスパルタに滞在していたアテナイ人使節が行った反対演説<sup>⑧</sup>である。アテナイ人使節は、ペルシア戦争において、ペルシアによる隷属からの解放やその防衛に果たしたアテナイの役割を強調した上で、自らの支配権の正当性について次のように主張している。

実際、我々がこの支配権を獲得したのは、暴力によってではなく、諸君が異民族の残留軍に対して戦う意欲を欠いていたために、同盟諸国が我々のところに来て、指導者の位置につくように要請したのである。<sup>⑨</sup>

それ故に自らは支配権を持つ資格があると主張した上で、名誉心や恐怖心、利益のためにその支配を手放さなくても問題ない理由として、次の点を挙げている。

我々が最初にこのようなことを始めたのではない。むしろ、弱者が強者によって征服されるのは、常に定まっていることだ

前五世紀後半における国際関係とアウトノミア概念

ある。同時に、我々は支配者の資格があるとして判断しているし、諸君からも今まではそのように見られていたのであるが、諸君は今に至って利益を計算しながら、正義の理論を計算している。しかし、何かを實力で獲得する機会に恵まれていながら、正義論を持ち出して、不当に獲得するのを遠慮するなどということは、未だかつて、一度も例が無い。そして、人間のフュシス(本性)に従っていないながら、自分の實力が許す以上に正義に従っている者があれば、その人こそ賞賛に値する。それ故、我々の判断では、他の人々が我らの支配権を獲得したならば、おそらく我々の行動が穩健である最上の証拠を提供するはずである。<sup>⑩</sup>

このように、強者が弱者を支配するのがフュシスであり、我々もそれに従っているに過ぎないとしている。その上で、ペルシアによる支配を念頭において、自らの支配は寛容であると主張している。

同様な論理は、第二章(二)で取り上げたメロス対談における、アテナイ使節の発言からも窺える。彼は、メロス指導者に対して、「強者自らの力を行使し、弱者はそれに譲るのが、世の中の道理だ」<sup>⑪</sup>「神、人いずれにせよ、支配する力を持っていれば、必ず支配を実行する」<sup>⑫</sup>と述べて、アテナイの支配はフュシスに基づいており、正統であると主張している。そして、アテナイの使節は、演説を次のように締めくくっている。

力の等しい者には譲歩することなく、力の勝る者には賢く振舞い、力の劣った者には寛容であることが最良である。<sup>⑬</sup>

ここでは、フュシスに従い、力量に応じて振舞うことが人のとるべき筋であるという理念が示されている。こうした秩序意識に基づいて、第三章(一)で提示したような、エウフェモスによる「エレウテリアを有す

る国、アウトノミアを有する国、それ以外の国」といった同盟国の序列付けがなされたことが窺えよう。

また、フュシス以外にも、様々な理由付けを考えて、アテナイは支配の正当化を図っていた。その一端を、カマリナ人に向けて行われたエウフェモスの演説<sup>76</sup>から窺うことができる。「アテナイは同族のイオニア人を隷属させている」というシユラクサイ代表の批判に対し、彼は、帝国を保持している理由としてイオニア人が進んでペルシアに隷属していた点を挙げた上で、次のように指摘している。

それ故に、我々が帝国を保持している理由は、まず、我々がギリシアのために最大の海軍力を提供し、最も固い決意を持つて戦ったのに対して、イオニア人たちはペルシアのために忠義を尽くし、我々に危害を加えようとした事実によって、我々にはその資格がある。<sup>77</sup>

このように、従属を常とするようなイオニア人には、「独立」した状態にあるよりは、従属した状態が相応しいとして、彼らが自らの帝国秩序の下にあることを正当化しようとしているのである。

これまでの考察から、アテナイは、「他国を隷属している」という反アテナイ側による批判に対して、支配そのものを否定するのではなく、様々なレトリックを駆使して、自らの支配の正統性を主張したことが明らかになった。このようにして作り上げた帝国秩序の下にある同盟諸国の状態を示すために、アテナイは「自治」の意味合いを込めてアウトノミアを用いていたと考えることができよう。

#### 第四章 アテナイ的アウトノミア理解は

特殊であったか？

第二章、三章の考察から、スパルタとアテナイは、自らの主張に相応しいように、それぞれアウトノミアを「独立」と「自治」の意味合いで解釈していたことが明らかとなった。それでは、アテナイの「自治」と反アテナイ側の「独立」、どちらのアウトノミア理解が一般的であったのであろうか。トゥキュディデスの記述に依拠するならば、一般に反アテナイ側の解釈が支持されていたように見える。実際に、彼の記述において、アテナイ人以外が「自治」概念としてのアウトノミアを用いるのは、アテナイによる解釈に言及する場合に限られているのである<sup>78</sup>。そうであるならば、やはり、アウトノミアⅡ「自治」とするのは、アテナイの特殊な解釈であったのであろうか。だが、トゥキュディデスの叙述を詳細に分析すると、この問題に関して興味深い事実がいくつか浮かび上がってくる。

まず、反アテナイ側の言説を詳細に分析するならば、彼らは「独立」の意味合いを込めてアウトノミアを用いているものの、元来、そのような意味をアウトノミアは持つていなかった可能性が窺える。とりわけそれは、スパルタとアテナイの交渉の場において詳らかになる。前四四六／五年の三十年休戦条約に反してアテナイによって自国のアウトノミアが侵害されているというアイギナの訴えなどに基づいて、前四三一年のペロポネソス戦争開戦前夜にアテナイに派遣されたスパルタの使節は次のように通告している。

ラケダイモン人は平和を望む。もしも諸君がギリシア人をア  
ウトノモスとして解放するならばそれは可能なのだ。<sup>79</sup>

ここで注目するべきは、アウトノモスに「する」——*poiein*——ではなく、そのような状態として「解放する」——*aphienai*——となっている点である。エレウテロスの場合には、そのような状態に「する」ことが解放を意味する。これに比して、アウトノモスに動詞として「解放する」が加えら

れている事実は、アウトノミアそののみではエレウテリアのように「独立」を表しえなかったことを意味している。

スパルタの使節からのこうした通告を受けて、ペリクレスがアテナイ市民に向けて行った演説の一節からも、アウトノミア単体では「独立」を意味しえなかったことが分かる。ペリクレスは、スパルタからの使節に対してなすべき返答について、アテナイ市民に向けて次のように語っている。

〈前略〉我々は、(a) 休戦条約締結の時点でアウトノモスであつた同盟諸国については、アウトノモスとして解放するだろうが、その場合にはラケダイモン人も、(b) 自分の都合のよいようにではなく、各ポリスが望むようにアウトノモスである——  
autonomeisthai: アウトノミアの動詞形——ことを、支配下のポリスに対して許すことが条件であるように。

(a)からは、アウトノモスに「解放する」が付け加えられたために、「独立」の意味が明確になっていることが分かる。そして、(b)から窺えるように、スパルタが「独立」の意味合いを強調しようとしているにも関わらず、アウトノミアは意味合いに幅のある概念であつたのである。

ここで取り上げたアテナイ・スパルタ間の議論以降、スパルタは「解放する」を加えずにアウトノミアを「独立」の指標として用いていることから、この時点を、アウトノミアⅡ「独立」とする新しい認識が誕生した分岐点と見なすことはできる。しかしながら、これまでに明らかにした事実は、少なくとも、それ以前において、そうした認識は一般的ではなかったことを示しているよう。

次に、トゥキュディデス自身があるポリスの立場について考える際、念頭にあるのは富裕者層である場合が多いことに注意する必要がある。②③ 実際には、第二章で行った分析からも窺えるように、彼の叙述において、

アテナイ帝国を批判するのは、ポリスの指導者や寡頭派なのである。単純に、寡頭派と対立する民衆派はアテナイに好意的であり帝国支配を受け入れていたと見なすことはできないものの、場合によっては、民衆がアテナイによる支配やそれを正当化するための言説を問題としていなかった可能性も見ることがある。いみじくも、アテナイの四百人寡頭政権の態度に関する、「デモクラティアが復活するよりは、たとえスパルタによる支配を受け入れてでも、政権を保持しようと考えていた」というトゥキュディデスの叙述は、ギリシア人にとつて、ポリスの「独立」した状態は内政における自由ほどには重要ではなかったことを窺わせる。

最後に、前四二一年に結ばれた国際条約であるニキアスの和約の条項に登場するアウトノミアは「自治」を意味している可能性があることに注意せねばならない。トゥキュディデスは、ニキアスの和約の内容について次のように語っている。

デルフォイのアポロンの神域および神殿とデルフォイの住民は、父祖の慣習に従つて、自己についても領地についてもアウトノモスであり、また、独自の税制、司法を有する——  
autoteles kai autodikos——)。

ここで、アウトノミアとは別に、「独自の税制および司法を有する」という条項が加えられている点が興味深い。Ostwaldは、もしもアウトノミアが税制や司法における外的な干渉からの自由を意味していたならば、条文はアウトノミア一語のみで事足りていたであろうと解釈し、この用例を、一定の制限を受けた状態をアウトノミアが意味しえた証拠として挙げている。④ これに対して、Hansenは、追加条項は「独立」した状態を表すアウトノミアの内容を説明しているに過ぎないのであつて、この用例を、アウトノミアが「自治」を意味する証拠とすることはでき

ないと主張している。<sup>83</sup>しかしながら、前四世紀の第二次アテナイ海上同盟の規約を記した碑文は、アウトノミアが何を意味するのかを、多様な解釈が可能な形容詞ではなく、「自らが望む国制の下にあること」など具体的の内容を記して説明していることと比較するならば、ニキアスの和約の場合、*Ostwald*が考えるように、外的な干渉を念頭においた「自治」を意味していた可能性を考慮する必要がある。

これまで挙げてきた事実は、*Hansen*が主張するほど単純には、アウトノミアⅡ「独立」とする理解が一般的であったと見なせないことを明らかにしてくれる。とりわけ、前四三年のアテナイ・スパルタ間の交渉は、アウトノミアが本来「独立」を意味しておらず、他国による支配も容認しうるような、「自治」を意味する概念であったことを示している。

### おわりに

これまで、トゥキユデイドスの用例の分析を中心にして、アウトノミア概念の用例を再検討してきた。その結果、次の事実が明らかとなった。まず、アテナイが自らの支配を正当化し、その帝国秩序の中に同盟諸国を位置づけるために、「自治」の意味合いを込めてアウトノミアを用いていたのに対し、スパルタを中心としたペロポネソス同盟側は、「アテナイの隷属からの解放」という自らのスローガンを踏まえて、支配からの解放によってもたらされる「独立」状態の指標としてアウトノミアを用いていたことである。こうした状況下において、デロス同盟から離反したミュティレネなど、反アテナイの立場をとる人々もまた、ペロポネソス同盟側の用法に従うことになる。

次に、アウトノミアⅡ「独立」とするのがギリシア人一般の認識であ

ったとする*Hansen*の主張は誤りである可能性が示された。本来、アウトノミアは「自治」概念に過ぎず、「独立」というのは、ペロポネソス同盟側によって、自らの主張に適するように創造された新しいアウトノミアの意味合いであったのである。

以上、本稿で明らかにした事実を踏まえるならば、前五世紀後半におけるアウトノミア概念の展開について、次のような図式を一つの可能性として示すことができよう。本来、アウトノミアは「自治」を意味していたため、少なくともアテナイによる支配と矛盾せず、アテナイは帝国内正当化の論理の中にアウトノミアを組み込んでいった。これに対して、アテナイによる勢力拡大に脅威を感じ、アテナイとの対決姿勢を強めていたスパルタを中心とするペロポネソス同盟側は、自らの掲げる反アテナイ・プロバガンダに沿うように、アウトノミアを「独立」の指標として読み替えたのである。第四章で提示したような、ペロポネソス戦争開戦前夜にアウトノミアを中心にして展開されたアテナイ・スパルタ間の交渉を、その転機として位置づけることが可能であろう。

このアウトノミア概念展開の図式は、*Ostwald*や*Rauflaub*が強調するような、抵抗の指標としてのアウトノミアが、ペロポネソス同盟側による反アテナイ・プロバガンダを通じて、初めて明確にその姿を現したという事実を我々に示してくれる。要するに、アウトノミアの抵抗の指標としてのポテンシャルは、アテナイとスパルタによるヘゲモニー争いの結果として、二次的に生じたに過ぎないのである。確かに、その後、ペロポネソス同盟外においても、反アテナイの立場をとる人々によって、スパルタによるアウトノミア解釈は共有されるようになる。しかしながら、アウトノミアを抵抗の指標として捉える場合には、純粋なアテナイによる支配への抵抗によってそれが生じたのではなく、アテナイとスパルタという強国によるヘゲモニー争いという構図から窺えるよう

な、権力構造がその背景にあることに注意する必要がある。<sup>⑤</sup>

## 註

① 近年、アテナイの帝国化の時期については、この状況を示すとされる碑文年代の再検討を通じて、前四二〇―一〇年代に引き下げるべきであるという主張がなされてくるが、P. J. Rhodes (Democracy and Empire, in: *The Cambridge Companion to the Age of Pericles*, L. J. Samons II (ed.), Cambridge, 2007, 55.) が指摘しているように、年代を確実に引き下げる事ができる碑文は、帝国化の状況を示すとされている数ある碑文の内のわずかに過ぎない。トゥキユデイドスによる記述など、アテナイの帝国化に関する史料全体から判断するならば、従来考えられてきたように、前四五〇年代にはアテナイによる帝国化の傾向が明確になっていたと見るべきであろう。アテナイの帝国化の状況については、Thuc. I.97を参照。

なお、本稿で用いる略記法は、*OCD*<sup>3 rev.</sup> (S. Hornblower and A. Spawforth (eds.), *The Oxford Classical Dictionary* (Third Edition Revised), Oxford, 2003.) に準拠する。*OCD*<sup>3 rev.</sup>に表記がなつものについては、必要に応じて上記のような形式で略記法を記す。

② 本稿では、内政における自由を有する状態を「自治」と呼ぶ。この場合、他国の影響下にあることは問題とならない。一方で、内政に加え外交においてもある程度自らの意思に基づいて行動できる状態にある場合、これを「独立」と呼ぶ。

③ アウトノミア概念の研究の大きな流れについては、仲手川良雄『古代ギリシアにおける自由と正義』創文社、一九九八年、五六六―五六八頁が参考になる。

④ E. J. Bickerman, *Autonomia: Sur un passage de Thucydide* (I, 144, 2), *RIDA* 5, 1958, 313-344. それ以前は、彼と同様に、マナーンが自由を制限された自由とした研究として、H. Schaefler, *Staatsform und Politik*, Leipzig, 1932, 166-175が挙げられる。

⑤ Bickerman, *op. cit.*, 339-341.

⑥ M. Ostwald, *Autonomia: Its Genesis and Early History*, Chicago,

1982, 1.

⑦ *Ibid.*, 13-14, 46. なお、P. Karavites (*Eleutheria and Autonomia in Fifth Century Interstate Relations*, *RIDA* 29, 1982, 145-162.) の程度権利を制限された状態を示すのかを巡って、アテナイと同盟国側で認識に差異があったことに配慮しつつも、アウトノミアが対外的な決定権を制限された「自治」の状態を示す概念であったとする。

⑧ Ostwald, *op. cit.*, 41, 47.

⑨ 森谷公俊「ポリス世界の国際関係」弓削達、伊藤貞夫編『ギリシアとローマ―古典古代の比較史的考察―』河出書房新社、一九八八年、九七頁。は、Ostwaldの研究を踏まえて、大国に対する抵抗のモニュメントとしてアウトノミアが登場しながらも、それは帝国による小国の統制手段へと容易に転化するようになったと述べている。

⑩ K. Rauffaub, *The Discovery of Freedom in Ancient Greece*, R. Franciscano (trans.), Chicago and London, 2004, 156. (Original: *Die Entdeckung der Freiheit: Zur historischen Semantik und Gesellschaftsgeschichte eines politischen Grundbegriffes der Griechen*, München, 1985.)

⑪ *Ibid.*, 152-153.

⑫ *Ibid.*, 155. E. Lévy (*Autonomia et éleutheria au V<sup>e</sup> siècle*, *RPh* 57, 1983, 270.) は、Rauffaub同様、エレウテリアとアウトノミアの根本的な違いは、大国との関係の有無にあるのではないとしている。Lévyによれば、両者の違いはそれが属する領域にあり、エレウテリアが理念的権利の領域に属するのに対して、アウトノミアは現実的な政治領域に属しており、具体性を帯びた「自治」を表す概念であった。

⑬ Rauffaub, *op. cit.*, 157-160.

⑭ *Ibid.*, 157; cf. Lévy, *op. cit.*, 264-265.

⑮ M. H. Hansen, *The Autonomous City-State: Ancient Fact or Modern Fiction?*, in: *Studies in the Ancient Greek Polis* (*Papers from the Copenhagen Polis Centre* 2), M. H. Hansen and K. Rauffaub (eds.), Stuttgart, 1995, 21-43. Hansenは、アウトノミアの含意を明らかにする際に、前五世紀後半と前四世紀の史料を区別無く用いており、時間的

な変化を念頭においていない点に注意が必要である。

なお、Hansenと同様に、アウトノミア＝「独立」に関する研究として、Th. J. Figuera, *Autonomoi kata Spondas* (Thucydides 1.67.2), *BICS* 37, 1990, 63-88 & G. Shipley, 'The Other Lakedaimonians: The Dependent Periokic Poleis of Lakonia and Messenia, in: *The Polis as an Urban Centre and as a Political Community* (Acts of the Copenhagen Polis Centre 4), M. H. Hansen (ed.), Copenhagen, 1997, 189-281; Inventory (M. H. Hansen and T. H. Nielsen (eds.), *An Inventory of Archaic and Classical Poleis*, Oxford, 2004.) などが挙げられる。ちなみに、Figueira (1990)の研究は、元々、アウトノミアは「独立」した状態を意味しており、制限された「自治」の意味合いで用いられることもあったが、それはアテナイによる特殊な用法であったと主張している。

⑩ Hansen, *op. cit.*, 43.

⑪ Thuc. II.71.2-4. アウトノミアの用例は、71.2と71.4に確認される。

⑫ Hdt. 1.96.1. 同様な用法は、Hdt. VIII.140.α.2に見られる。

⑬ エレウテリアやそれと語基を同じくする語の用例が九七であるのに対して、アウトノミアやそれと語基を同じくする語の用例は四八である。

⑭ これに対して、LevyやFigueiraは、先に取り上げた、トゥキュディダスの描くプラタイア人の発言などを証拠として、概念の起源は前五世紀の初期に遡ると主張する。だが、これは起源を特定できる直接的な証拠とは言いがたい。確実にアウトノミアが登場したとみなせる証拠に関しては研究者間でほぼコンセンサスがとれており、それは、前四四六／五年にアテナイ・スパルタ間で結ばれた三十年休戦条約である。この事実を踏まえるならば、OstwaldやHansen、Raufaubが主張するように、プラタイア人の発言にアウトノミアが用いられているのは、前五世紀後半の語法の反映に過ぎないと見るべきであろう。

⑮ Thuc. I.144.2.

⑯ 同様に、Hansenによる理解を批判した上で、解釈に幅がある「自治」概念としてアウトノミアをとらえるべきと主張する研究としては、A. G. Keen, *Were the Boiotian Poleis Autonomoi?*, in: *More Studies in the*

*Ancient Greek Polis* (Papers from the Copenhagen Polis Centre 3), M. H. Hansen and K. Raufaub (eds.), Stuttgart, 1996, 113-125 & P. J. Rhodes, Sparta, Thebes and *Autonomia*, *Eirene* 35, 1999, 33-40 & 挙げられる。

⑰ Thuc. IV.85-87.

⑱ Thuc. VI.75-80.

⑲ Thuc. III.9-14.

⑳ Thuc. IV.86.1.

㉑ Thuc. IV.87.5-6. Thuc. IV.88.1に、スパルタの当局者がブラシダスに誓約した点として、「同盟国はアウトノモスたること」が挙げられている。

㉒ Thuc. VI.77.1-2.

㉓ Thuc. III.11.1.

㉔ その他にも、同様な用例は反アテナイ側の立場をとる人々の認識に見られる。ギリシア人がアウトノミアを「独立」の意味合いで用いている例として、以下の事例が挙げられる。

Thuc. I.67.2 (アイギナ→ペロポネソス同盟諸国：アテナイによる不正な支配を訴えて)、I.139.1, 139.3 (スパルタの使節→アテナイ：支配からの諸国の解放を求めて)、I.140.3, 140.4, 144.2.7 (ペリクレス→アテナイ市民：スパルタの要求を伝えて)、II.72.1 (スパルタ王アルキダモス→プラタイアの使節：「独立」した状態の保持を求めるプラタイア人に答えて)、III.46.5 (アテナイ人ディオドトス→アテナイ市民：ミュティレネによる同盟からの離反の本質的な原因について)、V.27.2 (コリントスの使節→アルゴス：アルゴスが同盟を結ぶ場合の、対象国家の地位について)、V.31.4 (スパルタ→エリス：エリスのペリオイコイであったレブレオンへの、エリスによる支配を不当と判断して)、V.77.6, 79.1 (スパルタとアルゴスの条約：ペロポネソス同盟諸国のあるべき状態について) なお、研究史で取り上げたように、ペロポネソス同盟軍に包囲されたプラタイア人が行った演説の箇所 (Thuc. II.71.2, 71.4) で、「独立」の意味合いを込めてアウトノモスが用いられているが、これはアテナイ側に与する同盟国でさえもスパルタ側の認識を共有していたという事実を

示しているわけではない。この問題については註⑤を参照。

- ③1 Thuc. I.113.  
 ③2 Thuc. I.97.1.  
 ③3 Thuc. VII.57.3.  
 ③4 Thuc. VII.57.7.  
 ③5 Thuc. VI.85.2.  
 ③6 Thuc. VI.69.3. 同様に、支配下にある従属国と対極に位置し、「独立」した状態をアウトノモスとして表現している事例は、シュラクサイ陣営の構成 (Thuc. VI.88.4, VII.58.3.) や、マケドニア遠征におけるトラキア王シタルケスの軍勢の構成 (Thuc. II.96.2, 96.4.1, 96.4.2, 98.3, 98.4.) および、トラキア王に対抗した勢力 (Thuc. II.101.3.) に関する叙述に見られる。
- ③7 既に取り上げた以外で、叙述においてトゥキュディデスが自ら評価を下す場合に「独立」の意味合いでアウトノミアを用いている事例は、Thuc. II.16.1 (テセウスによってシュノイクスモスが行われる以前のアテナイについて)・II.29.3 (トラキア王テレスによる大王国建設以前のトラキアについて)・V.33.3 (スパルタによるマンティネイアの属領パラミアの解放について)・VIII.91.3 (同盟諸国の支配の維持が叶わない場合に、アテナイの四百人寡頭政権がその次に望むアテナイの状態について) から確認される。
- トゥキュディデス同様にアウトノミアを「独立」の意味で解したのは、研究史で取り上げたヘロドトス以外では、専制支配の状態との比較において、アウトノミアを保持する状態を取り上げているHippoc. Aer. 16.13, 16.24, 23.7が挙げられる。
- ③8 反アテナイ・プロパガンダに関しては、Raaflaub, *op. cit.*, 193-202を参照。
- ③9 演説I: Thuc. I.68-71. 演説II: Thuc. I.120-124.  
 ④0 Thuc. I.68.3.  
 ④1 Thuc. I.121.5.  
 ④2 Thuc. I.16.1, 18.2, 74.2.  
 ④3 Thuc. I.124.3.

④4 スパルタが自らを「ギリシアの解放者」としてしきりに宣伝していたことが、前述のコリントス人の演説I (Thuc. I.69.1.) やアルキビアデスがティッサフェルネスに対してなした忠告 (Thuc. VIII.46.3.) から窺える。

- ④5 Thuc. IV.85.1.  
 ④6 同様な言説は、ペロポネソス軍が、アテナイと同盟を結んでいたプラタイアに遠征し、プラタイア代表と交渉した際に行った演説の「諸君もアテナイの下にある人々を解放するのに協力するべきである。これほどの軍備や戦争が行われているのはこれの人々や他の人々を解放するためである。」(Thuc. II.72.1.) に確認される。
- ④7 Thuc. III.10.3-4.  
 ④8 Thuc. III.11.  
 ④9 Thuc. III.69-81.  
 ⑤0 Thuc. V.84-114.  
 ⑤1 Thuc. VI.81-7.  
 ⑤2 Thuc. VI.85.  
 ⑤3 Thuc. VII.57.3-7.  
 ⑤4 HCT. IV. 434-435; Ostwald, *op. cit.* 28, 33; Lévy, *op. cit.* 264-265; Raaflaub, *op. cit.*, 149-157.  
 ⑤5 Raaflaub, *op. cit.*, 154-155.  
 ⑤6 一方で、Hansen, *op. cit.*, 32-33は、トゥキュディデスはコンテクストによって異なる意味合いを込めてアウトノミアを用いていたのではなく、一貫して「独立」状態の意味でこの概念を用いていたと理解する立場から、伝統的な解釈に反対して、アテナイ陣営のリストの正確な読み方を明らかにしようとしている。その解釈は以下の通りである。
- まずは、キオスについて。Hansenによれば、トゥキュディデスによるアテナイ側に組する諸国についての叙述は、「立場(従属国か独立しているか)」「地域」という大きな2つの分類の上に成り立っていた。トゥキュディデスは、イオニアという地域的種類の枠組の中で、貢税を納めて従属している諸国(ミレトス、サモス)と、軍船を提供することでアウトノミアを有する(「独立」した)状態にあるキオスを明確に区別する



- ⑦⑥ Thuc. V.11.4-5. このアテナイ側の主張とポリス間正義の関係については、仲手川、前掲書、三九〇～三九四頁を参照。
- ⑦⑦ Thuc. VI.81-87. これは、第二章で取り上げた、シュラクサイ代表の反アテナイ演説に対抗してなされた。
- ⑦⑧ Thuc. VI.83.1.
- ⑦⑨ これに関連して、Figueira, *op. cit.*, 82は、いかにアテナイの理解が特殊であったかを強調するために、アテナイに組するプラタイア人が「独立」の意味合いでアウトノミアを用いていた事実を挙げている。しかしながら、事例として挙げられるのが、前四二七年にペロポネソス同盟軍がプラタイアの地を荒そうとした際に、プラタイア人の使節がスパルタに対して行った演説 (Thuc. II.71) の中の用例であることに注意する必要がある。ここでは、あくまで、スパルタ人による「隷属からのギリシアの解放」というスローガンを踏まえて、「そのように主張するならば、我々を隷属化するべきではない」と述べているに過ぎないのである。それ故に、この事例は、プラタイア人のようにアテナイ側に与する諸国も、反アテナイの立場をとる国家と同様、「独立」の意味でアウトノミアを解釈していたとする証拠にはならない。
- ⑦⑩ Thuc. I.139.3.
- ⑦⑪ Thuc. I.144.2. その他に、「解放する」という動詞が補助的役割を果たしている用例としては、Thuc. I.140.3, 140.4が挙げられる。
- ⑦⑫ 以上の状況を踏まえるならば、前四四六／五年の三十年休戦条約は、各国の「独立」を承認した条約ではなく、むしろ、アテナイとスパルタそれぞれのヘゲモニー下において、デロス同盟とペロポネソス同盟の各加盟国に、ある程度の「自治」を保障した条約と考えるべきであろう。実際に、三十年休戦条約以降も、アイギナはアテナイとの同盟下にあり、貢税の支払いなどを課せられていた。
- ⑦⑬ この問題については、G. E. M. de Ste Croix, *The Character of*

Athenian Empire, *Historia* 3, 1954/5, 141に詳し。

- ⑦⑭ Thuc. VIII.91.3.
- ⑦⑮ Thuc. V.18.2-3.
- ⑦⑯ Ostwald, *op. cit.*, 7.
- ⑦⑰ この解釈を巡っては、Hansen, *op. cit.*, 30-32を参照。また、Raaflaub, *op. cit.*, 156では、Hansenと同じ視点から、アウトノミア概念は国際関係において重要な役割を果たしていたものの、国際法の概念としては不十分であったため、その都度、ケースに応じて明確な定義が必要であったことが指摘されている。
- ⑦⑱ RO. (P. J. Rhodes and R. Osborne (eds.), *Greek Historical Inscriptions 404-323 BC*, Oxford, 2003.) 22, II, 19-23.
- ⑦⑲ 興味深いことに、前四世紀におけるテバイ・スパルタ間のヘゲモニー争いにおいても、アウトノミアの解釈が問題となっている。スパルタは、アウトノミアを「独立」の意味に解して、「ポイオテティア連邦は、アウトノミアの理念に違反してポイオテティア諸国を従属させている」と主張し、テバイの勢力基盤となっているポイオテティア連邦を解体しようとした。その一方で、テバイは、アウトノミアを「自治」の意味で捉えて、自らの主導する連邦にポイオテティア諸国が所属していても問題ないとした。Keen (1996) や Rhodes (1999) は、こうした状況を踏まえて、アウトノミアは解釈に幅のある概念であったと解釈しているのである。これに対するHansenの反論については、M. H. Hansen, *Were the Boiotian Poleis Deprived of Their Autonomia during the First and Second Boiotian Federation? : A Reply*, in: *More Studies in the Ancient Greek Polis (Papers from the Copenhagen Polis Centre 3)*, M. H. Hansen and K. Raaflaub (eds.), Stuttgart, 1996, 127-136 と、*Inventary*, 92-93を参照。
- (本学大学院博士後期課程)